MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１２．１０　発行元
第 535 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中山七里『いまこそガーシュイン』

９月に宝島社から中山七里の『岬洋介音楽シリーズ』の最新刊『いまこそガーシュイン』が出た。現在の世界の社会情勢を取り入れた作品になっている。今回もまた「岬洋介」の活躍は目を見張るものがある。

ガーシュインという作曲家

ガーシュインという作曲家はモーツァルトやベートーヴェンに比べるとそれほど有名ではないかもしれない。何しろ二十世紀になってから活躍した比較的新しい人なので…。ヨーロッパの生まれなのだが、アメリカに渡り、ジャズなどの音楽を取り入れ、ヨーロッパのクラッシック音楽とアメリカの他民族の音楽の融合を図った人物である。

代表曲は本書にも登場する『ラプソディ・イン・ブルー』。さまざまな演奏形態があるようだが、スタートはピアノ二台の組み合わせで考えられた曲らしい。

アメリカの大統領選挙から…

物語のきっかけになっているのはアメリカの大統領選挙。ヘイトスピーチが渦巻き、人種間でのデモ活動が間断なく繰り返され、社会がどんどん分断化されていく。

私も思うに、アフガニスタン問題、地球温暖化などの環境絡みの話、新型コロナウィルスによるパンデミック、ロシアによるウクライナ侵攻、ハマスによる攻撃から始まったイスラエルとガザ地区の問題（この文を書いているのは１１月初旬）などの遠因としてアメリカ大統領選挙結果が大きく響いているような気がしてならない。社会の中で、自分と自分の仲間たちだけを守り、それ以外は攻撃の対象とする流れが続いている感覚なのだ。

本書の語り手・エドワードはそんな社会情勢に心を痛め、なんとか人種間などの融和が図れないものかと考える。そこで思いついたのがガーシュインの音楽。エドワードはショパンコンクール入賞者として岬と共に『ラプソディ・イン・ブルー』をカーネギーホールで共演し、音楽の力で「認め合う社会」の実現を伝えていきたいと考えるのだった。

ミステリの味はやや薄め

ということで、今回はミステリ要素はかなり薄め。大統領の暗殺を狙う〈愛国者〉という人物の動きも絡めてはいるが、メインはエドワードと岬の演奏にある。当日の演奏の様子はこのシリーズの他の作品同様圧倒的な迫力で描かれていて、読み始めると途中で止めることができなくなってしまう。

雑誌『このミステリーがすごい！』に４回に分けて掲載された関係もあってか、他作品に比べると短く、ストーリーもシンプル。作者の「思い」のようなものを率直に書いた作品の気がした。

今後の作品に期待を…

巻末に、『連続殺人鬼カエル男完結編』が次に出て、その次に『とどけチャイコフスキー』が出ると予告が書かれている。書きたいもののアイディアが豊富な中山七里。まだまだ期待できる作家だと思う。

《音楽ミステリ・シリーズ》

1．さよならドビュッシー
2．おやすみラフマニノフ
3．さよならドビュッシー前奏曲（短）
4．いつまでもショパン
5．どこかでベートーヴェン
6．もういちどベートーヴェン
7．合唱　岬洋介の帰還
8．おわかれはモーツァルト
9．いまこそガーシュイン

いずれも宝島社から単行本で出た後、何年か経ったものは宝島文庫になっている。たいていどこの図書館にもある。

長岡弘樹　「球形の囁き」

８月に双葉社から出た本。（危うく買い落すところだった。発行部数が少ないせいだろうか…）　『傍聞き』そして『緋色の残響』と続く羽角啓子・葉月母娘コンビのシリーズ。雑誌『小説推理』に連載した５編を集めた短編集。『教場』シリーズと双璧をなす長岡弘樹の代表的シリーズ。今回の作品にも意表を突く展開がたくさん盛り込まれている。

第一話『緑色の暗室』。この時葉月は高校生。新聞部に所属し、写真の現像をするためマンション内の四階にある貸し暗室を利用することに。ふとしたはずみで一枚のフィルムを下の三階のベランダにおとしてしまう…。ここから先が、植物の葉の光合成の話になる。こういう実験系は私の専門。ヨウ素溶液によるデンプン反応は思いの外デリケートなところがあって…。第二話の『球形の囁き』では葉月は大学生。葉月がアルバイトをしているデパートの店員が冷凍倉庫で撲殺されていた。捜査に入る啓子。ここで登場してくるのがバルーン＝風船なのだ。トリックに関わるので詳しいことは書けないが、これまた理科の実験かかわりで、これまた私の得意とするところ。音の波は本当に不思議な現象を引き起こしてくれるものだ。…５つの話ごとに葉月は成長を続ける。時間が一気に数年跳ぶので、読んでいる方としてはドキドキするような感覚に陥る。